

覚書「鬼と舟と鳥」

佐藤 暁

(一) はじめに

戦後、大分大学教授であった故半田康夫氏等によって、大分県民俗学会が開かれ、民俗学の研究や採訪が盛んになった。半田教授の歿後も、数多くの民俗学の報告が大分県地方史に発表され、単行本として発刊されて来ている。

最近では、大分大学の富来隆教授によって魏志倭人伝の女王卑弥呼に関する、ニュークな論文が発表された。^①この時期にあたって、日頃からの霊觀念の研究についての考察をまとめて、附して大分県の伝説にもふれ、あるいは考古学的事例にもふれてみたいと思った。しかし、この小論中には、あくまでも推察や試論を出ないむきも少くない。そこで、読者は、この小論を純粹な研究論文として読むのではなく、単なる民俗学的、文化人類学的読物の覚書きとして読んでいたゞきたい。このことを最初にお願しておきたい。

(二) 鬼のこと

鬼は古くから庶民生活に密接な関係を持つ存在であった。大江山の鬼退治や、桃太郎の鬼退治の話など、三才の童子も童話として知っている。吾々の土地でも一寸気をつけると、鬼に関係のある伝説が多い。別府市北石垣の「鬼の岩屋」は装飾古墳である。こゝは、豊後風土記の鼠の岩屋で二匹の鬼が住んでいたという。この古墳については帆足萬里先生が享和年間に著した「肄業余稿」で「酋帥有力者葬埋之地」として「以石為椰、蓋本邦古時之制也」とし墓と考察している。このように、古墳を鬼の岩屋、鬼塚などとよぶのは、同じ装飾古墳の東國東郡國見町の鬼塚古墳など、十基ほどが、文化財保護委員会刊の『全国遺跡地図（大分県）』^②でみられる。およそ人力で動かし得ない大石で築た建造物や、岩窟などには、鬼の伝説を残したものが多い。日出町南畑の別府ゴルフ場の北で、富田部落の近くに「鬼のせんちん」というのがある。それは対立した自然石の巨岩で、この大岩を跨いで、鬼が脱糞していた場所だと伝えている。豊後高田市の夷狩場の「鬼が威も、怪石巨岩疊せる自然の石窟で、口は狭いが窟内は広く、鬼の住み所などところである。こゝは、鬼神と化して赤熱した鉄を手で引き延し刀に鍛治したという、紀新大夫（鬼神太夫）行平の爐趾という伝説

がある。同じ高田市の田染の熊野権現の石段は、巨石疊々として、その中腹に有名な熊野磨崖仏がある。この石段も、昔、熊野の鬼が、神と「一夜のうちに百段の石段を社前に築けば 里人を喰ってもよい」という約束で築き、百段目で、神の鶏の仮声に驚いて立去ったという伝説が残されている。この類例は、宇佐神宮境内の百段や、東國東郡国見町来浦の岩戸寺の三十仏。別府市塚原の塚にまつわる伝説などがある。また、石上の凹みや、池沼の形が、人の足跡に似ていても、それをダイダラボッチのような巨人や鬼の足跡とするむきも少なくない。^⑨東國東郡国見町来浦から、熊毛浦の向田に越すところに「鬼の足跡」のある石がある。これは昔、鬼が向田の石を右足で踏み、次いで岐部の石を左足で踏み、伊美の中村の石を踏み、姫島に渡り、瀬戸をこえて立去った跡だといひ、岐部、伊美中村にも、鬼の足跡のついた石があるといふ。

大江山の酒頭童子。茨木童子。戸隠山の女鬼の紅葉。鈴鹿山の鬼。悪路大王などは、婦人をかどわかし、通行人の金品を強奪した一種の山賊と考えられるが、鬼の子孫というのも全國所々にある。日田市の名門大蔵氏は、「其系図を見たとすると、比家の始祖は、妙量鬼といひ、三毛入命十三世の孫で 同地に來住すと伝えている」といひ「その一族は代々鬼大夫と稱した」といふ。江戸時代の日本三大農学者

の一人、大蔵永常も喜大夫（鬼大夫）と稱していたといふから、一生農業技術の普及に命を捧げた人が鬼の子孫とは面白い話である。この類例を二三あげると、大和の大峯山麓に五鬼村といふ所があり、役行者が大峯山を開いた折に従事した鬼の子孫が繁殖し、五鬼助、五鬼堂、五鬼園、五鬼勝、五鬼作の五軒の旧家を本家とする村になったといふ。京都市外の鞍馬の貴船神社の旧社家に舌氏といふ姓があり、その系図によれば、先祖は牛鬼だったそうである。栃木県鹿沼市古峯原の古峯神社の宮司石原氏は、先祖は役行者に仕えた妙童鬼といふ鬼だった由。京都市外の八瀬童子も鬼の子孫だといひ、これには、京都の近くに鬼の子孫がいると言ふので、世人の興味を引いたらしく沢山の記録が残されている。

(三) 鬼と靈

鬼という字は、漢字の発明國中國では、幽靈を意味するもので、干宝の搜神記や、怪異譚で有名な聊齋志異など読んでみると、いろいろの鬼、幽霊が、公孫九娘や辛氏十四娘などの美人となり、恋人と同棲したりして、その艶美なことは、とうてい不気味な日本の幽霊の比ではない。日本でも平安時代頃では、鬼の字を、オニと読む以外に、モ

ノと訓ずる場合もあった。モノニクルウのモノであり、モノノケ。モノクルイ。モノスゴシのモノである。鬼はそれ故に、目で見る事ができない存在でもあった。これは鬼の觀念が亡霊に発しているとすれば当然であろう。鬼は恐ろしいというデモニカルな一面が発展し化現し、人を喰ひ殺すようになったにちがいない。「日本釈名」によると、「人死して、その霊あるをオニ」とあり、「今昔物語」卷二七には、狩人の母親が鬼と化し、その子を喰おうと山にいった話がある。これは生きた人間が、そのまま鬼になったのである。「本朝故事因縁集」⁽¹⁹⁾にも、怨霊が人を殺す話がある。承応年間、大阪中の島の商人で、隣家どおしで同日同刻に子を生んだ。一方は男子、一方は女子であったので、両親は奇瑞として、子供が十五歳に成長すれば夫婦にしようとして約束する。七歳の時に結納をとりかわし、十五歳になった。約束の結婚の段になって、娘方の父は商売に失敗し零落した。そこで男方の父親は、貧乏人の娘との結婚は益なしと破約した。ところが、娘は無念の情はれ難く病で死んでしまう。そして娘の怨念がこつて鬼となり、男の家にとび入って、男を頭から足までひき裂いてしまうのである。このように、死霊は一寸したことでも激しやすく、ともすると「たたり」をする。特に千載のうらみを残して異常の死をとげた人の霊ははげしく、怨霊や御霊となつて、病氣や災害をもたらす。奈良朝以降の

政争の激化した時代では、その権謀術策のもとに多数の人が悲惨な末路をたどつた。恒武の廢太子早良親王は、延暦四年、淡路配流の途上薨じたが、その後、疫病が流行した、朝廷はこれを太子の怨霊のためとし、勅使を特派し法要を営んだ。恒武天皇の皇子伊予親王は、返逆の罪で河原寺に幽され、のち毒殺され。藤原広嗣は僧玄昉のためおとしいれられて、天平十二年に肥前松浦で斬られ。橘逸勢は、承和五年に恒貞親王の事件に連座し、伊豆で配流のうち死んだ。これらの死後、疫病が流行したが、それは、これらの人々の悪霊のためとされ、それをなごめるため諸國や都で御霊会が開かれている。大宰府で死んだ菅原道真の悪霊に対する恐怖は深刻なものがあつた。政敵の時平の死と子孫の断絶。さらに延長八年の清涼殿の落雷事件は時の人の耳目を驚動させた。保明親王の薨去も、たまたま流行した疫病も、みな彼の怨霊のたたりとして、御霊信仰にむすびつけられ恐れられた。朝廷は道真の霊に対し正二位をおくり、天曆元年には北野に社殿を建立した。このことは鎌倉時代に描かれたという「北野天神縁起繪卷」や「神道集」の「北野天神の事」などの縁起などに詳細に記載されている。保元(20)の乱の崇徳院や宇治大臣頼長の怨霊は源平合戦の因となり。承久の變の後鳥羽院の怨霊のすさまじさは、三浦義時、北條時房、執権の北條泰時の死、さらに後醍醐天皇の崩御まで、故院のたたりとされた。

今日、京都の今宮社の祭りを「やすらい祭」²² というのも、魂をやすらわせる意味であろう。帆足萬里全集所収の「西嶋先生余稿」に「今宮明神祠記」²³ というのがある。これは佐藤源兵衛の譏言で、大友義鎮に殺された大神親長の怨霊を祀った祠で、現在でも日出町大字大神の南大神部落の日豊本線の踏切りの横にある。寛政九年、日出藩士二宮兼善が編集した地理書「図跡考」²⁴ の第十卷藤原図跡考では、百若大臣に殺された悪臣別府の太郎、次郎の怨霊を祀る別府社があり、祭礼の夜は機音、鉄瓶の湯の沸る音までも消し、神の恐れたという記載がある。このように、雷が暴れた、疫病が流行した、稲に虫が入いたとかの災害があれば、怨霊の仕業とされていた。怨霊は「地獄草紙」や「餓鬼草紙」²⁵ などの絵巻物や「百鬼夜行図」²⁷ などによると鬼の姿で描かれ、鬼として観念を持たれていたから、神社仏閣の祭礼や年中行事には、鬼払いや、鬼しづめの行事がつきものである。國東半島の六郷満山で七日正月の夜執行される「修正鬼会」²⁸ も、ヒナレのクライマックスは、岩屋から出現する鬼を鎮める行事で、差定によると「鈴鬼」「鬼招」「鬼鎮」となっており、鬼を鎮める「鬼シズメノ餅」が大切な役割をもっている。この鬼会は六郷満山の外に、宇佐郡駅川町山本の鷹栖観音堂でも旧正月におこなわれ、部外では、和歌山県伊都郡天野村の大隆寺で正月十四日に行われる「鬼走り」行事や、奈良の東大

寺の「お水とり」³⁰ 行事、尾張熱田の神宮寺（密宗）で正月五日夜おこなう俗に「鬼祭り」³¹ とよばれる修正会等々、追儺、修正会、蘇民曳き等鬼を払う行事は枚挙にいとまがないほどである。怨霊||鬼が神と祀られる反面、神自身も鬼として表現されていることも多い。筆者が採訪した六郷満山の右利岩戸寺の鬼会でも、松明を持った二匹の鬼が参詣者の肩や背を叩いて加持することや、部落の民家に走り出て祈禱すること。東北地方のナマハゲ、中國地方ホトホトなど正月に鬼の扮装で各家々を訪れる行事、豊後で正月に「トモシモンを祝うちよくれ」³³ と顔をかくして米を入れた小俵をとりに来る行事などから考察するとはじめは、神そのものの来臨が、神の姿態を知らさぬよう異装したため、鬼として変化し、神↓ものけ↓鬼↓人への転化をもたらしたのである。このような死霊崇拜及び死霊観念について日本以外の近接民族のなかでひろってみよう。

(四) 未開民族の霊

中部台湾山地のブヌン族は、精霊、神霊、死者の霊を共通してカニトと表現している。人間の右肩にはよいカニトが、左肩には悪いカニトが一つづついると信じ、人影（カニング）は生きたものカニトで

あるという。右のカニトはよい事をシウとし、左のカニトは悪事を企む。そこで左右のカニトは争う。人が悪事をするのは左のカニトが勝つたからである。危地にのぞんで一生をうるは、よいカニトの守護によるものである。また悪いカニトは山の断崖や森にもいて、人をそこに誘いこんで食べるといふ。ブンヌ族では、心臓のあるイサン(生霊)がカニトになる。病死者のカニトのおもむく山は、山地と平地の境界近くにあると信じられ、この他界を「カニトのアサン(部落)」とよんでいる。変死者のカニトは天におもむくと信じられている。ブンヌ族に近接するツオウ族は神霊、精霊、死霊、妖怪などをヒッターと呼び、部落の守護神、穀神、猟神、樹霊等も含まれている。毒蛇もヒッター・ノ・フコイとよばれヒッターの一種に含まれている。人間にはビービヤとフゾオまたはヒョーとよばれる二つの霊があり、ビービヤは頭の中にある。死後はビービヤは身体から離れて死霊の國におもむきヒッターになるという。ツオウ族に隣接するサール族では、ヒッターに類似したイリッターがあり、神祇、靈魂、祖霊から精霊、死霊、妖怪等も含ませている。土地霊はイリッター・サラロアナであり、運の強いことはビ・イリッターである。人間の靈魂であるテイラ・ラヴァは死ねば、イリッター(死霊)となる。精霊はターモと称され善性を意味し、変死者のイリッターは一般に悪神になると信じられている。台湾北部のアタヤル族はリットフやイリットフまたはア

リットフなどの語で、神霊、靈魂、死霊、靈鬼、妖怪などを含めている。ウットフにも善、悪の二種があり、悪いウットフは変死者の霊となる。人々が死ぬとウットハンに靈魂はおもむくが、変死者はそこに行けない。ウットハンは西方にあると信じられ、そこに行くのには虹の橋を霊は渡って行かねばならない。東海岸平地のアミ族では神霊、死霊などをカワスと呼び、そのうち帰化社、飽干社では、台南の生藩シラヤ社と同様にデイトしとリトトと呼び、観念内容はカワスと大差がない。フィリップ島のルソン島に近い紅頭嶼のヤミ族では、アノミトウヤアノトの用語で呼び、主として死靈魂をさし、著しく恐怖心が強い。死者は、森の墓場のカニトワンに持って行って埋葬し、帰途は槍を振るって死霊をおどしながら帰る。フィリップン諸島の原住民族では、神霊、死霊などを表象する用語はアニトである。かつてスペインの宣教師たちは、早くからフィリップン人の宗教をアニテリアと呼んだ。アニトにも善霊と悪霊があり、有名な神霊も無名の精霊もアニトで区別されず含まれている。マニラのタガログ族は最高至上神のバタラの配下に種々のアニトをもっている。アニトは各自の役目を持つ。人々はバタラに犠牲を供えることなく、アニトに供える。バタラは天空に住む大王であり、話しかけることはできない。アニトは降りてきて人間に話すことができるから人々はこれに祈るのである。アニ

トは死者の精霊であると解されている。このアニトの観念は、北ルソンの山間族。パンパンガ州のフロリグブランカ附近のネグリト。ポントク・イゴロト族。カリンガ族。イフガオ族。カンカイナ族・ポントク族。イフガオ族・アバヤオ族などでも見られ、カリンガ族ではバートンとよばれている。またミンダナオ島のダウオ地区の未開民族でもバゴボ族等⁴⁴でアニトの観念が見られる。

ボルネオのカヤン族ではトーと呼ばれているが、漠然とした威力を表わす共通語として用いられている。これらの威力は恐怖の対象にはなつても悪意はない。しかしすぐ恐つて人間にあらゆる種類の不幸をもたらすと信じられている。トーのうち最も重要なものは千首と結びついたもので、首はトーにより生気づけられ、豊作をもたらしなどして一家に繁栄を与えてくれる。そこで屋内に吊してある首は鄭重に怖れをもつて遇される。トーはまた墓、川、森、山、洞穴、海などにもいる。人々はその怒を避け融和するため種々の儀礼を行なう。死や病氣、発狂、けが、凶作などの災害はトーの悪意によるものとされ、耕作にあつては、ジャングルを切ひらき、稲まきの準備をするときは、宿る樹木がないといつてトーが怒らぬよう、若干の木を切らず残しておく。トーをなだめるには鶏卵、鶏の血、小豚などが供儀される。マライ人の間では、悪霊、死霊、妖怪を表している語はハントウ⁴⁶である。

これに対し精霊をイスラム風⁴⁷にジン、神をアラールと呼ぶが、実際にはハントウとジンは混同される場合が多い。マライ人はイスラム化された今日でも鶏の血と卵・米・バナナ・ココヤシの実・タバコなどを供えて祈り、アラールにはただ祈るだけである。ミクロネシアのモリエック諸島⁴⁸ではニットウ。マーシャル諸島のアニチュヤグム島⁴⁹ではアニトの名で呼ばれ死者霊を指している。中央ポリネシアのサモア島では、四段階の霊があり、(一)アトウアは神で、ポロトウまたはランギとよばれる天に任んでいる。アトウアは大地と住民など世界創造の神であり、祈願されることがない。(二)トウプアは首長たちの神格化された精霊で、ポロトウや若干の対象物に宿っている。(三)アイトウは本来の神の子孫を含めた階級で軍神、家族神、予言者や魔術者の祈願する神である。(四)オサウアリは、死霊や確かなど含まれ悪意ある下級の霊的存在である。高砂族のバナバヤン族、北ボルネオのテンバスク。キアウ。ブタタン・ドスン族ではビルアと呼ばれる精霊⁵⁰があり、南ボルネオのダヤ諸族、中部ボルネオのケンヤ・ダヤ族⁵¹などではハム・バルアンとリアウという二つの精霊を種々の変化語で呼んでいる。ハム・バルアンは睡眠中に肉体を去る精霊であり、リアウは人間の死後に去る精霊である。この傾向はマダガスカル島のタナラ族⁵²、ニュー・ジランド島のマオリ⁵³にも見られる。

インドシナ半島では神靈観念、とくに死靈観念はビーである。この分布は汎汎で、悪霊をシャン語でフビーといい、ラオス族、シャム人

でもビーである。ラオス族では、精霊、悪霊、死体、悪鬼など汎汎してビーと呼び、妖怪はビー・サット。森の霊はビー・パ。ビー・パは狂人の霊である。ラオス伝説で有名なビー・ナークは巨大な鬼であり、ビー・フォンは排泄物を喰う日本の戯鬼に近いビーである。ビーを操縦するシャーマンも一般にビモ・ビーとよんでいる。この信仰はタイ族・モイ族⁵⁵・西江山間地の土族にも信仰されている。これまで、インドシナ系民族およびインドシナ半島の民族にひろく分布しているアント・ブルワおよびビーの観念内容を略記した。これらの民族では精霊・死霊・妖怪など分類されている観念を総括包含して併称されていることは、日本の鬼の観念と近似しているといえよう。

(五) うつぽ舟と犬

このように霊⁵⁶ 鬼に対して恐怖の念を持つことから、自ずから一線を畫して、鬼の住む他界と、人間の目界を意識的に境を引くことは当然のことであろう。幽明境を異にするとはこの事である。人の寄り付き難い深山や高山・深い森などが神や霊の住むところとして、山上

他界の思想が生れ。海の彼方の知らぬ国に他界を求めるのは自然の理である。

晩年の柳田国男先生の研究テーマの一つは、根の国の問題、つまり死霊の国の問題であった。柳田先生の「海上の遺⁵⁷」では、肥前の下五島の大値賀島の北部海岸にある三津楽岬を、万葉以来の歌に出ているミミラク崎と同じだと考えて、源俊賴の散木奇譚集の中の「尼上らせたまひて後、みみらくの島のことを思ひ出でてよめる」歌としてみみらくの我日本の島ならば

けふも御影にあはましものを

といふ歌の、この島に行けば、亡き人の顔を見ることのできる言い伝があつたことを指摘し、三井楽、ミミラクといふ地名は、結局は西南諸島の東方海上のかなたの楽土ニルヤ・カナイと同じことばであり、それは記紀の神代巻の根の国にまでさかのぼることばであり、それが海上の故郷であり、海上他界であるとした。このような思想から、潮のつて海の彼方からはこぼれ海岸にうちよせられた漂流物の「よりのもの」についても、他界からの流れて来たものと考えるむきがあり、網にかかった石や木を神や仏として祀った由来の神社が少くない。東国東郡香々地町の福田寺の三十三年目に御開帳するといふ烏帽子観音は、同寺八世の禪堂和尚の代に新左衛門といふ漁師の網にかかった貝

だと伝え、東国東郡武蔵町の白石神社は漁師仁吉の網にかかった八ッ
の白石を八大竜王として祭ったと伝えてゐる。南海部郡米水津村の浦
代浦天満社は、昔、同浦の大願寺の先祖が網でひろいあげた光明を放
つ菊目石を祀つたものといふ。同村の竹野の天神様も海からあがつた
光明を放つ絵馬を釣月寺の僧が神として祀つたといふ。大分市鶴崎の
三佐の八坂権現も、漁夫の彌藤治が発見した光明を放つ石である由で
ある。このように海からあがつた石や仏像の例は数多くあるだろう。
古代では、神は年に一度、海から、または海に通じている川をとおつ
て、遠いところから訪問してくるという「マレピト」の思想も海上他
界の觀念と同じものである。このような他界からの漂着物のうち特色
あるものが「うつぼ舟」である。このうつぼ舟伝説で著名なものは、
大隅正八幡の本縁と記録されたものがある。「震且国陳大王娘大比留
女、七歳御懷妊、父王怖畏をなし、汝等末幼少也、誰人子有慥申べし
と仰ければ、我夢朝日胸覆吮、娠也と申給へば、彌驚て、御誕生皇子共
空船乗、流れ着所を領し給へとして大海浮奉、日本大隅磯岸着給、其太
子を八幡と号奉、依此船着所を八幡崎と名、是継体天皇御子也、大比
留女天筑前国若宿山へ飛入り給後、香椎聖母大菩薩と願給へり皇十六代國留り
て正八幡宮祝れ給へり」とあり、日光を感じ処女が神子を生み、これをうつ
舟に乗せて流す形式を伝えている。この類例は、我国では多く、柳田先生は、

この話ほもと八幡本社にあつて、あとおそく朝廷の認定と両立せざるを懼り、
次第に南端の一社に押つけたものと推測されてゐる。南海部郡米水津村
でも、昔、この地に流れついたうつぼ舟に乗つた上臈を、持物や金品
に心をうばわれ、鉛（ヤス）で目を突き殺したので、それより一村、
目の病が多いと伝え、また同村の大内浦では、うつぼ舟で流れついた
上臈と若い漁夫の恋物語が残されており、今でも女権が強く、「大内
浦の唐臼へちこち」という諺があり、舟を陸に上げるのも他村と異り、
臈からさきに引上げるといふ。前記の大隅八幡の伝説と同じモチーフ
のものは、サルーエン流域のバラウン人の伝説にもある。「ある王が
子供に恵まれず願をかけ、七日間齋戒すると、王妃の夢に神が現われ
マンゴを与えた。その結果王妃は出産するが、生れたのは人間ではな
く Water-snail を産む、王は筏を作り、生れたホ・イを
金の壺に入れ水に流す。やがて筏はナーガ（竜）の国に着く、ナーガ
の王妃がこれをたすけ、王のもとに連れていくと「これは人間の子で
ある、われわれの臭気が彼に達すると生命を断つであろう」と王は云
つて、再びホ・イを流す。筏はつぎに鬼の国に着く、女鬼がこれを認
め、壺をあけホ・イを連れて帰る。七ヶ月の後、ホ・イは女鬼の留守
に人間に変形する。そして十年間女鬼の許に暮すが、ある日、彼は禁
忌を犯し、倉に登り、そこに積まれた獣の白骨を見る。そして彼は女

鬼の服と、水、火、風の元素を少量ずつ盗み逃亡する。その後、彼は旅をしてチャムバーナゴ国に着く。その国王が折から公主の婚をえらぶため、公主の投げた頭巾の当たった者を婿にする約束をする。王女の投げた巾はホ・イにあたる。若者は女鬼の服を着ているので衆人の嘲笑をかい、王は、この若者を婿とするのを恥じ、娘と共に王宮より追放する。しかしホ・イは王女を宝の谷に連れて行き、装麗な宮殿を建て、立派な姿に変わり、王と仲直りをし、その国土の半分をもらう」という筋である。パラウン人の間では、この物語と共に、太陽とナーガの女が産んだ卵が川上より流れ浮州に流れ着いて老夫婦に拾われ、これが割れてコクヤと云う子供が生れる。その子が成長し弓の名手になって、巨鳥を射殺し、パラウン王朝の租となるという伝説が語られている。これに類するものは、新羅国の始祖伝説にもある。三国遺事の伝によると「南解王の時、駕落国の海中に船があつて来泊していた。その国の首露王が臣民と鼓舞して迎え、留めようとした。缸は飛走し、新羅国の阿珍浦に至った。一姫が、これを望み、海中に岩のないのに何故に鵲の鳴くやと、尋ねると鵲は一隻の小舟の上に乗っていた。缸の長さ二十尺、広さ十三尺の櫃がある。櫃を開いてみると、中に端正な男子があり、七宝と奴婢が満されていた。七日の後、その男子が云うには、自分は竜城国の者であるが、吾国には二十八の竜王あり、人

胎より生れて五六歳より相繼ぎ王位に登って民を導く、その他に八姓があり、皆大位に登ると。父の含達婆は積女国の王女を娶り妃としたが、子種なく、祈禱の拳句、七年目に大卵を産む。大王は群臣を集めて評議すると、不詳として櫃を作り、中に自分と七宝、奴婢を入れ、舟に乗せ海に流し、縁なる所にゆき国をなせといい、赤竜をして守らせ、此処に至ったのである」という。この話は、三国史節要に異伝があり、阿珍浦で迎えたのは村長阿珍等であり、櫃を開くと卵がある。そこへ鵲が飛来して卵を啄むと、中より童男が出て、自から脱解と称したという。三国史記では、脱解はもと多婆那国という倭国の東北一千里の国に生れたといひ、その国王が女国の王女を王妃とし、七年間身籠って大卵子を生んだ、王は不祥として棄させるが、妃はこれを帛に包み、宝物と共に櫃に入れ海に流した。櫃は流れて金官国に漂着する、この国人怪しみて取らない。次いで辰韓の阿珍浦に至る。海辺の老婆が、櫃を開いてみると小児がいる。これを養うと長大に及び身のたけ九尺もなり、姿容知能も優れている。名は不明であるが、櫃が流れたとき一羽の鵲が鳴いてこれに随っていたから、櫃が流れたといくくるんだ櫃から解いて出たから脱解を名にしたという。この種の伝説は、ギリシャでも、ダナエが金の雨と化した天神の種を宿し、インドのブリターが日神スリーヤの子を懐胎し、吠舍婆王の妃の産んだ子が

恒河を流れる時、黄雲の如き蓋で掩われ⁽⁷⁴⁾。ジャワのラーデン・パークの伝説では、主人公を入れ海に乗せた箱が光を放つて漂い、通りかか⁽⁷⁵⁾りの船に救われ、その後、マライのスリラーマの沖で海中に乗せられた主人公が、毎朝上る日を押しつつ海水に浴するを行としたラジャに救れ。グシャラトの話では、水に乗せられた双生児は、太陽崇拜者である貧乏人に救われ、男はスーリヤ（太陽）、女はチャンドラー（月）と名づけられた等がある。中国では、徐国の僇王の物語がある⁽⁷⁷⁾。後漢書の注の博物志によると、徐君の宮人が妊娠し卵を産む、これを不祥として水浜に乗せると、孤独の母の飼犬「鵠倉」というのが口に銜えて帰る。母がこれを覆い暖めると小児となる。宮人これを聞き引取り、長じて徐君となったという。徐国は徐夷ともいわれ、淮水流域の東夷の国である。「鵠倉」という犬は、死に臨んで角を生じ、九尾であり、黄竜となったと伝えている。海南島のヒアイ・ア族では、昔、この島の北の大陸の王が、脚傷に悩み、これを医した者に王女をあたえたと約す。一匹の犬が約束を確かめた上、傷を舐めて治癒する。ところが王は治ると約束を守らない。そこで病は再発する。二度目に治癒してくれた犬に、王はしぶしぶ王女を与えるが、代りに屋根のある小船に乗せ、二人を海に流してしまふ。これが海南島に流れつき、夫婦となり一男子を生む。その犬が息子に殺され、後に母子結婚して人祖となる

という。山海経の海外北経によると、犬封国の記載があり、注に「昔、盤瓠弑王を殺し、尚辛美女を以てこれに妻わす。以て訓うべからず。乃ちこれを浮べ、会稽東南海中三百里の地を得て封ず、男を生めば狗たり、女人は美人と為る。是を狗封の民と為す」とある。メキンコのフィチオル・インデアンの洪水伝説⁽⁸¹⁾でも、老婆のお告げにより、無花木の箱の中に牝犬と共に入った男が、五年間、水に漂い、大洪水の終つた後、犬と共に穴居するが、毎日留守中に夕食のパンが用意されているのを怪しみ、物陰よりうかがうと、犬は皮を脱いで女となり、パンを焼くのを発見し、皮を取りて火中にくべてしまふ。こうして二人は婚姻する。この話の前半は苗族の伝説のモチーフに似ているが、後半は犬嫁の説話である。日本でも、水界に行った人が子犬の類を買って帰りに金持になる話⁽⁸²⁾や、水辺に流れついた木株から生れた白犬が、花咲爺の富をもたらす話などと関連が辿られよう。

(六) 盤瓠神話と犬神

ウイン大学の故ウイルヘルム・コッパーズ教授（一八八六—一九六一）は、中国南部の少数民族の母権文化的要素として、母権、歌垣、復葬、新年豚の屠殺、竹王祭祀（竹からの人間起源）、盤古神話の他

に、①盤瓠神話。②帽子に犬の耳の特徴を模倣する風俗。③盤瓠の遺言により、盗んだ牛を供儀する盤瓠の記念祭。④犬が天上より穀物の種子をもたらす話。それ故に新年豚が殺される収穫祭には、先づ犬に飼が与えられる風習。⑤死霊を他界に導くため犬を殺す風習。などが指摘されている。①は猪族に固有であり、苗族は猪族より受容したものである。②③は猪族の民俗である。④はロロ族、苗族、西蔵族にも見られる。⑤は苗族。セマナガ族。アオ・ナガ族。カレン族。満州族満州ツングース族にも見られる。これらのうち①、②、③の三要素が原理的にも、内容的にも密接な関連があると考えられ、エバーハルドも同一の文化複合に属すると認められている。竹村卓三氏は犬は東南アジアにおける古い家畜であり、猪族の「犬神話および犬崇拜を、北方のマデンよりも東南アジアの原始栽培民文化に由来するものと推測する」と論じた。この盤瓠型式の神話の発生と伝播を、大林太良氏は「紀元前第一千年紀のボンテッシュ・ワンダーリングを含む、内陸アジアから華南山岳地帯への民族波動の一つと関連があるとして」^⑤考察している。④の犬が穀物の種子をもたらしたモチーフはエバーハルドが指摘したように、洪水神話と結びついた型式のものは「水稲耕作文化」と関連があり。結びついていない型式は焼畑栽培民文化層に存在していたと推察される。富采隆教授が大分坂の市で採集した「犬神は弘法大師

が唐より帰る時、足の臍の中に粃米をかくして帰った。それを守って来たのが犬神である」という話は前者に類するものである。⑤の死者を他界に導く犬の観念は、コバーズやブリーザによってまとめられている。^⑥ガロ族、ラクハー族、トンキンの苗族などは犬であり。ロロ族は豚。チン族は豚と鶏。カシー族は雄鶏。カレン族は鳥。トー族は家鴨が死霊を導くのであって、このうち鳥類は、しばしば三途の川の表象と結合している。吾国の神話でも日本武尊の霊が白鳥と化して飛び立つ話があり。^⑦「餅的」でも餅の霊が白鳥と化す話があり。宇佐神の出現でも、神が霊蛇となり、化して鳥となる等は、水稲耕作文化と関連が考えられ。犬、豚の場合は三途の川の表象と結びつきがなく、かつ印度西部の古層焼畑栽培民にまで分布しているので、古い焼畑穀物栽培民文化に属すと考えられる。^⑧コバーズは、この観念を犬祖観念と同じ複合と見ており、死者の導犬の観念は、盤瓠型神話より古い時期に拡がり、部分的に後者によっておおわれたと考察している。^⑨

(七) 舟と鳥

さて、犬や鳥が死霊を他界に導く思想は、死者が船に乗り他界へ行くといふ「死者の船」の観念と舟葬との関連がうかがえよう。

ボルネオ南部のマガシユ・タヤク族の葬儀のティワーは、民族の教ある葬儀で民族学研究者になじみ深いものである。人は死後、靈魂の靈魂と靈魂の身体の二つに分れる。靈魂の靈魂は、人の死後ただちに靈魂の身体と分離しレヴ・リマウ（他界）へ行こうと試みる。しかし、ティワーが催されなければ到達できない。そこで幽霊となり、病氣となり、嵐となり種々の崇りをする。しかし、ティワー儀式が催されると、靈魂の靈魂は解放され、救済され、他界レヴ・リマウに舞い上っていく。ティワーが祝はれるまえに、遺族は長さ二・三米、巾一米ほどの板を彩色して設置し、この板の上にテムボン・テロン（テロン）の舟を描く。しかも何度も様々に描写され、その都度名前が異なる。しかし船の上の描かれた凶象はいつも同じである。舵のところには、船頭のテムボン・テロンが立ち、その前にいる人物（靈）は完全に耐火性の人物である。鋭利な武器で空気を分散し、涼気を放射させ、熱気でテムボン・テロンが興奮するのを防ぎ、天気を回復させる。この船はそれ自体が一羽の犀鳥である。嘴はダヤク族では、すべての鳥のなかで、その重さと大きさで、太陽を包みかくす靈魂を破壊する力がすぐれているという。この船に乗って靈魂たちは他界へいく。靈魂だけでなく、ティワーにあたって陳列された宝物、消費された飲食物、ティワーにあたりおおっぱらに、あるいは詭計で殺され頭蓋骨を奪われた奴隸や哀

れな少年たちも共に他界へ急ぐ。このような板がティワーにあたって設置され、雄鶏が供儀され、その血が死者を入れた棺にふりかけられる。その時、ティワーは始まり、死者の船バナマ・ティンガングは旅に出発する。二十四時間に一度、テムボン・テロンは靈魂の町へ急ぐ、道は危険になり、ついに火の湖に達する。航海のテンポはのろくなる。ついで現世に神聖なおきてを破つた者の靈のさまよう広野に達する。するとティンガング船の力は衰え、恐しい悪臭が大気を汚す。しかし、テムボン・テロンは目から灼熱を放射し、舟は救われ他界の黄金の広野へと渡っていくのである。しかし靈魂はいつまでも黄金の広野に止ることは許されない。現世における七倍の期間、ここに止つたあと、地上にもどつて、果実、茸、葉、草の一つ一つに宿るのである。人間がこれを食べることにより、靈魂は人間の中に入り子供として生れてくる。フロウベスウが指摘した如く、テムボン・テロンは、朝、疾風のように出発し、火の湖に達すると速度が落ち、そして突然両眼から灼熱の光を発し、最後には障害を克服し淨福な黄金の広野へと進む。これは太陽の航行を暗示するものである。ティワーと太陽の關係は他でも見られる。死者の国に使者を送ろうとする場合、ダヤク族では、テムボン・テロンの船の図に一本の網を結び付ける。この網に貝殻や木片を一つ結びあける。この貝等は、使いを出そうとする者が前もつ

て唾を吐きかけ、鶏の血を塗ってあったものである。網は日没時にし
ばりつけなくてはならない。使者の返事の必要な時は、この網を翌日
の暁に再びほどこき、自分の体にしばりつける。そうすれば次の夜、回
答の夢を見ることができるとされている。このように復葬と死者の舟、
太陽の船の観念の結合が見られるが、ベトナムのドンソン文化にも、
この観念が見られると考察しうる考古学的証據がある。近年ボルネオ
のニア洞窟より船型棺が発見されたが、この他にも、フランスの考古
学者コルベフによってハノイの東洋学院博物館の銅鼓についての研究
がある。この銅鼓の上に、鳥をかたどった異様な人物が武器を持って、
鳥頭の舟首、鳥尾の船尾の舟にのって船出することが鑄出されている。
コルベフは、これをダヤク族の靈魂を他界に運ぶ船との類似性をも
とめ、同様の葬式の光景を描写したとした。松本信広氏が論じた如く、
ドンソンの青銅器に見る動物は、鳥の他、竜、鹿、守宮、蟻、鼯の類
であるが、人間が仮装しているのは鳥類のみである。このように靈魂
が鳥に化する思想は、天の鳥船と共に広く東南アジアに分布している。
ここで再び目を日本にもどしてみたい。

(八) 天鳥船と古墳

松岡静雄氏の「大平洋民族誌」によると、「吾国で棺をフネととな
え……葬の古語はハフリであるが、ハフリは「流す」「放つ」の意味
に用いられたことは「古事記」遠飛鳥宮（允恭帝）の段に「大君を鳥
にハフラバ舟あまり、いかへり来むぞ」とあることによって明らかである。
また「万葉集」卷一六の怕しきものの歌中に

おきつ国領君がしめ屋形しらさむ

黄染のやかた神の門わたる。

とある屋形は舟の意であることは、古来わかつていたが、冥界の主
となるべき貴人の遺体をのせた船が、幽邃な峽門をおもむろに流れて
行く、ものすごい光景を叙したものであることは、今日まで誰も気づ
かず、揣摩臆測をたくましようしていたのであった。隋書倭国伝の項下
に「葬するに及び、屍を船上に置き陸地にこれを牽く」とあるのは必
らずしも無稽の説ではない(88)としてゐる。また松本信広氏は「古事記
の中に天鳥船という神名が見える。これが事代主のところに使者とし
て降下してくるのであるが、書記によると三穗之岬に使者稻背脛を乗

身はずでにたいへん合理化しているが、最初はおそらく、鳥が靈魂を太陽または天に送り届けるといふ南洋に広く行われている鳥船信仰と関連をもったもので、古代日本人もかつては鳥と船とを結びつけ、これを天宮または太陽へとかようすがと考ふる習俗を有したのではあるまいか⁹⁹。ここで松本氏は記紀の天若日子の葬儀を話題とする¹⁰⁰。豊葦原の千秋の長五百秋の水穂国は天照の子孫の統治する国であるから、出雲の大國主と國譲りの交渉のため天若日子を高天原から

地上に使させた。ところが天若日子は、大國主の娘の下照比売と結婚して八年たつても復命しない。そこで鳴女（鶏）が天より下つて天神の命令を伝える。ところが、天若日子は、天佐具売にけしかけられ、この雉を射殺したが、この矢が高天原にまで達する。矢の羽に血がついているのを見て、高木神は「もし天若日子が、命令に従つて悪神を射たなら悪神に、もし邪心があるならば天若日子に当るようにな」と空よりその矢をつき放つ。矢は寝ている天若日子の胸に当つて死んだ。

『書記』によると、この死体を運んで喪屋をつくり殯するとき、川雁きざりもちを持傾頭者。鳩うめまきを尸者とし、雀を春女とし、鶇鶇を哭者とし、鳩わづらを造綿者とし、鳥を突入者とし、およそ衆鳥をもつて、ことよさし八日八夜啼きかなしみ、しのだという。ここでさかんに登場する鳥類は、松本氏が述べている如く、天鳥船觀念の反映であつて、地上において

非業の死をとげた若い太陽子天若日子の魂を天界につれもどし慰めるためであろう。中山太郎氏は¹⁰¹、かつて天皇陵の墓穴を掘る人夫を八咫鳥とよんだのも、鳥が葬列に加わることが必要であるという觀念があつたためであろうとしている。大分県下で、葬式の際、棺に冠せる壺屋をスズメドと呼び、屋根の四隅にスズメまたはつばめの造りものが着けられるのも、このことに無関係ではなく、盆に靈がづばめに乗つて帰つて来ると伝える地方があるのもこれに関係があらう。また、一般に棺をフネ、入棺をオフネイリとよぶところは少なくない¹⁰³。また葬儀の世話役をフナウドとよぶのも舟葬との関係が推察される。我國の古墳時代の木棺が割竹型であり、石棺にも舟型石棺があることも一考に値いする。割竹型木棺は、経六〇纏ほど、長さ六米前後の大きな丸木を二つに割つて、それぞれ内部を削りぬいて蓋と身としたもので、その材料は必ず高野嶺が選ばれている。日本書紀の神代巻に、¹⁰² 椁材に用ふことと一致している。この形式の木棺は内部のスペースがたつぷり三〜四人ほど入るほどで、丸木舟のように長いところから舟に似せて作つたと云う学者も多いが、小林行雄氏のように疑問をもつ学者もいる。古墳時代には、この他に天鳥船の觀念を示しているものに裝飾古墳の壁画である。福岡県浮羽郡吉井町の珍敷塚古墳は昭和二十四年採石業者の手によつて破壊され、わずかに奥壁下段の巨石と、

それに続く右の側壁の下端の一部しか残されていないが、その壁画は見るべきものがある。この奥壁の壁画は、石面のほぼ中央に、一つの羅字文と三個の靱を画き、その左に重圍文、その下方に、両端がゴンドラ状にそり上った舟があり、舟上には二本のマストのようなものが接してたち、その間に帆のようなものがある。舟の船先には鳥が描かれている。舟の反対側の右端には蝦蟇の絵が描かれている。その上にも同心円の重圍文が描かれている。さらに巨石の下方にはこれらの全体をのせる大きな舟が描れ、さらにその下方に朱と無地の青の中広い線がある。蝦蟇は月・鳥は太陽を表わすのは中国思想で、朝鮮の高句麗の古墳の壁画にもある。しかし、大陸の中国神話では、太陽は母なる女神が御者となり車に乗って大空を天駆けるのであるから、この珍敷塚の壁画とは根本的に思想が違う。太陽は舟に乗って海洋を航海することになってゐる点は、ドンソン文化の銅鼓の舟と同様であり、壁画全体を更に一つの大きな舟に乗せ、その下に太陽の光の反映の赤と海の青を示す青線を入れる点は、前述のテムボン・テロンの舟ともモチーフが似ていると考えられる。試みに九州地方の装飾古墳を分類すると、福岡県嘉穂郡桂川町寿命の王塚や同県の鞍手郡若宮町の竹原古墳のように馬を中心に、竜馬を馬に配して汗血馬をうる思想をモチーフとした（竹原古墳）など、高句麗古墳の影響と思われる一群と。珍

敷塚古墳のように②舟、鳥をモチーフとする壁画。熊本県上益城郡嘉島村の井寺古墳や、久留米市京町の日輪寺古墳のように③直弧文をモチーフとする壁画や、熊本県八代市大風蔵東麓古墳の石杖のように④大刀や、鏡、短甲、靱などをモチーフとする一群に分類される。これらのうち①③④までは太陽を表象とする同心円の重圍文や呪術的意味をもつとされる三角文が組まれており、更に、②の場合は、福岡県筑紫郡筑紫野町の五郎山古墳や大分県国東郡国見町鬼塚古墳のように狩猟や漁労の壁画が組合はされている場合もある。前方後円墳であり、筑紫君磐井の墓に比定され、直弧文を持つ冢型石棺を主体の福岡県八女郡広川町の石人山古墳や、初期の横穴式石室古墳の久留米市浦山古墳等を古式とする③の直弧文の壁画をもつ古墳は、別として。①の壁画を有する古墳が、福岡県桂川町王塚古墳が前方後円墳であることから、古式と考えて見ると、高句麗古墳の壁画の影響があつたのは、②に属する壁画をもつ古墳は円墳もしくは横穴であり。その退化様式と考えられる。大刀、短甲、鏡などの器物をモチーフとする壁画の④に属する古墳は、箱式棺の石杖や横穴の壁画であるところを見ると。古墳時代後期の初頭に伝播した高句麗古墳で示される中国思想は、後期の中葉には、日本古来の天鳥船思想に融合消化され、②類の壁画となり、やがて死人の手前の富である漁労や狩猟から、死者の直接の

富である副葬品の壁画に転化したものではあるまいか。(別表・九州装飾古墳) 覧表参照。

(九) おわりに

これまで記述したように、鬼・うつば船・天鳥船・装飾古墳と見て来たように、紀元三世紀以降つまり、彌生式後期の時代から古墳時代へ平安時代の日本古代では、幾多の民俗学的重層が見られる。この時代こそは日本国家の成立、つまり、邪馬台国から大和朝へ、郷土では宇佐神宮の成立の鍵をとく時期である。この重層を一つ一つほぐしていくことが、その底に秘められた歴史を解く鍵ではあるまいか。試みにこの寛書を記した次第である。諸先生、先輩の御叱正をお願いしたい。

九州装飾古墳一覽表

肥前	肥後	国 (佐賀県・長崎県)		前方	画色彩彫刻跡 浮線史特数字 内分数字学	別史は幾何 数字のなのみ
		国	地方			
伊勢古墳	肥後	佐賀県神埼郡神埼町志波屋	後円	■ (円文・同心円文)	△ (石棺前面・円文三角文)	○ (石棺内面・同心円)
西隈古墳		佐賀市金立町西隈	後円	■ (同心円・三角文・船・鐵手文・楯・花文・人物・騎馬)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
太田古墳		鳥栖市田代町太田	② 円墳	■ (同心円・三角文・船・鐵手文・楯・花文・人物・騎馬)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
鬼の岩屋古墳		長崎県杵臼郡勝本町国分	円墳	△ (魚)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
京ヶ降黄穴群		球磨郡錦村大字西字養白毛	④ 横穴	○ (鵜・楯・朱と魚)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
■ 本横穴群		人吉市城本町城本及び鳥飼	④ 横穴	○ (三角同心円・鵜・楯・馬)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
田の川内甲古墳		八代市白奈久新田町田川四	円墳	△	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
大泉蔵オワリ宮古墳		八代市泉蔵町大泉蔵	円墳	□ (柳壁・円文・朱塗)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
大泉蔵東麓古墳			不明	△ (石棺内面)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
大泉蔵西北麓古墳			不明	△ (石棺内面)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
大戸南古墳		天草郡松島町阿村下古鼻	不明	△ (柳壁・円文)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
大戸北古墳			不明	△ (柳壁・円文)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
長砂進古墳		宇佐郡不知火町高良塚原	③ 円墳	○ (柳壁直孤文・同心円)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
塚原第一号古墳			② 円墳	△ (船)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
桂原古墳			② 円墳	△ (同心円・船・墨書同心円)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
鴨籠古墳			③ 円墳	△ (石棺蓋・同心円・熊本城内直孤文)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
飯又古墳		宇土市恩塚飯塚飯又	② 円墳	△ (船・木葉)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)
潤野古墳		立岡潤野	円墳	△ (石棺内三角文・同心円)	△ (石棺内面・同心円)	○ (石棺内面・同心円)

◎伊美鬼塚古墳	◎加賀山一鬼手 横穴群	◎日田八観音古墳	◎法皇寺 第三号古墳 ガランドヤ 第一号古墳 ガランドヤ 第二号古墳 第一号古墳	◎穴ヶ葉山古墳	◎六ヶ葉山古墳	豊後	◎千代丸古墳 鬼ヶ城古墳 玖珠鬼塚古墳 玖珠町小田	◎下馬場古墳	◎浦山古墳	◎日輪寺古墳	◎伊美鬼塚古墳
東国東郡国見町伊美中柱石	宇佐郡四日市町 手加賀山一鬼 横穴	内河野町倉園	日田市免連町法皇寺	築上郡太太平村下唐原 山穴ヶ葉	北九州市小倉区日明	国 (大分県)	玖珠郡森町帆足 玖珠町小田	久留米市草野町草野前畑	上津町浦山(軒茶屋)	京町日輪寺	久留米市草野町草野前畑
◎内墳	◎内墳	◎内墳	◎内墳	◎内墳	◎内墳	◎内墳	◎不明	◎内墳	◎前方	◎後方	◎内墳
△(鳥・船・大葉)	■(同心内文など)朱	○(同心内文・船・鳥・人物)朱・黒	■(同心内文)朱	■(同心内文)朱	△(鳥・動物・大葉)	△(木葉・鳥)	△(鳥・動物・大葉)	■(放射状線)朱	△(同心内文・直狐文・朱塗布)	△(同心内文・直狐文)	■(同心内文・三角文・靱)朱・青

註 (註)

1 富来隆「卑稱呼」学生社 昭和四五年

2 帆足万里「肄業余稿」巻之二 帆足万里全集上巻五八一頁下段

3 文化財保護委員会「全国遺跡地図」(大分県) 昭和四二年

4 「大分県郷土伝説及民話」大分県教育会、昭和六年 一五頁

5 前引書 一〇頁「熊野の鬼」

6 前引書 二七四頁「八幡に関する雑伝説」

7 前引書 二九頁「三十仏」

8 日出町藤原鰐次河宮臺市八六才より聞く

9 柳田国男「一目小僧その他」ダイダラ坊の足跡 二六六頁

10 中山太郎編「日本民俗学辞典」「鬼の子孫」

11 日本民俗学協会編「日本社会民俗辞典」(一) 一一九頁

12 中山太郎前引書 三三九頁及び「民族と歴史」五〇二

13 中山太郎前引書 三三九頁及び「栃木県誌」等

14 「日本社会民俗辞典」(一) 一一〇頁及「橘忍自語」巻七・宛 若宿領経」巻五等

- 15 千宝著竹田見訳「搜神記」東洋文庫(10) 平凡社
- 16 柴田天馬訳「聊齋志異」巻一及び巻二参照 創元社刊 昭和二十六年
- 17 武田静澄「河童・天狗・妖怪」河出書房 一九五六
- 18 「今昔物語集」(三) 巻一十七 本朝編 東洋文庫
- 19 武田静澄前引書 二〇三頁
- 20 「絵巻物」原色日本の美術8 小学館に既説がある
- 21 貴志正造訳「神道集」東洋文庫(94)平凡社 一八四、一三七頁
- 22 武田静澄前引書 二〇七頁「日本社会民俗辞典」(1) 四四九頁
- 23 「帆足万里全集」西 先生余稿 六九七、六九八頁
- 24 拙篇「凶跡考」その三 大分県日出藩史料(3) 一〇八、一一頁

- 25 「絵巻物」原色日本の美術8小学館及び海沢政三編「日本常民生活絵引」
四〜五参照
前引書参照
- 26 西日本新聞社「幽霊展目録」昭和四年
- 27 和歌森太郎編「くにさき」修正鬼会「平田康夫三二一〜三三〇他に文化財委員会「正月行事」に拙稿がある
- 28 文化財委員会刊「正月行事」および大分県地方史四二号に小玉洋美氏の報告がある。
- 29 中山太郎「日本民俗辞典」三四一頁「鬼祭り」
- 30 鈴木百平「祭礼の鬼」郷土研究四二
- 31 柳田国男監「日本民俗図録」二四〇頁・同氏監「民俗学辞典」四二七頁参照
- 32 大分県速見郡日出町大字大神軒井の佐藤ヨシノ九〇才に聞く昭和十年ごろまでおこなわれる
- 33 古野清人「原始宗教」角川新書(一七五頁)がもっともわかりやすい
- 34 古野清人前引書 一七七頁
- 35 古野清人前引書 一七八頁
- 36 古野清人前引書 一七九頁
- 37 古野清人前引書 同頁
- 38 古野清人前引書 同頁
- 39 河村以雄「南方文化の探究」創元社「三三七」四〇及び鹿野忠雄「東南亜細亜民族学先史学研究」三三八〇頁
- 40 「南方民族図譜」厚生省研究所人口民族部編昭和十八年 九九頁〜一三三頁
- 41 古野清人前引書 一八一頁
- 42 古野清人前引書 一八一頁
- 43 古野清人前引書 一八四頁
- 44 「南方民族図譜」八七頁及古野前引書一八五頁
- 45 古野前引書 一八六頁
- 46 古野前引書 一八七頁
- 47 古野前引書 一八七頁
- 48 松岡静雄「大平洋民族誌」一八三〜一八四頁
- 49 「南方民族図譜」八四〜九三頁
- 50 古野前引書一九一頁
- 51 古野前引書一九一頁
- 52 松岡静雄「前引書」一九四〜一九六頁
- 53 松本信広「印度支那の民族と文化」印度支那の民族一〜五頁
- 54 松本信広「前引書」二〇〜二七頁
- 55 松本信広「前引書」一九頁
- 56 柳田国男「海上の道」定本柳田国男集「第一巻筑摩書房
- 57 「大分県郷土伝説及民謡」烏帽子観音 一頁
- 58 前引書 八大電王 三五頁
- 59 前引書 天満社由来 (一)湘代浦鶴尾天満社 一二三頁
- 60 前引書 天満社由来 (二)竹野浦鶴尾天満社 一二三頁
- 61 前引書 八坂権現 八八〜八九頁
- 62 惟賢比丘筆記、柳田国男「妹の力」三二九、三三〇頁
- 63 柳田国男「うつぼ舟の話」「妹の力」所収。「うつぼ舟の王女」昔話と文学」所収など参考
- 64 前引書 柳田 三二九頁
- 65 山田平之助「大分県教育」第五〇九号「独木舟の伝説」
- 66 大分県郷土伝説及民謡「独木舟伝説」二二五頁
- 67 Leslie Mine, An elementary Palau Grammar, p.146:
J. Przyluski, La Princesse à l'odeur de noisette
et la Nagi, Etudes Asiatiques, vol. 1, p.269
M. I. Ine, The Home of an eastern Olan, Oxford, 1924.

- 68 Mi line, 前引書
- 69 「文化人類学」所収松本信広「古代伝承に表われた車と船」一〇〇頁
- 70 松本前引論文
- 71 松本信広「日本神話の研究」一九九頁 鎌倉書房
- 72 前引書
- 73 前引書
- 74 前引書
- 75 前引書
- 76 前引書
- 77 松本信広「鯨鯨の一資料」東洋史集説
- 78 Sarat Chandra Mitra, The Dog-Bride in santali and Jepcha Folklore, Journal of the Bihar and Orissa Research Society, Vol.14, 1928.
- 79 松本信広前引書
- 80 Frazer, Folklore in the old Testament, Vol. 1, P.277-279
- 81 柳田国男 海神宮号 民族学研究五卷ノ二
- 82 柳田国男 「海神少童」「桃太郎の誕生」八四頁
- 83 大林太郎 Wilhelm KOPPEBS の中国南部少数民族の研究について」
- 84 中国大陸古文化研究第一集
- 竹村亨二 「高地栽培ヤオ族の文化―南シナ非漢民族に関する文化史的研究」民族学研究 24 一六五頁
- 85 大林太郎 前引書 38頁
- 菅峯隆 「卑瀾呼」学生社 一〇九頁
- 87 Frazer, J.G. 1933, The Fear of the Dead London, 一八九―一九〇頁
- 88 Frazer, J.G. 前引書 一九一―一九三頁
- 89 日本書記 豊行天皇紀
- 90 「大分県郷土伝説及民謡」伝説朝日長者 二二七―二三二 この伝説は有名である。この話は豊後風土記にも記載されている。柳田国男「一目小僧その他」餅白鳥に化する話」参照
- 91 菅峯隆 前引書 七四頁
- 92 大林太郎前引書 三九頁
- 93 大林太郎前引書 四〇頁
- 94 Schäfer, H. 1946, Die Gottesidee der Ngadi-Djakas in Süd-Borneo, Leiden.
- 95 Fro Denus, Leo. 1901. The Childhood of Man., New York 1969
- 96 V. Golombek, le Tambour métallique de Hoàng-ha BÉFEO., XI, 1940; L'Age du Bronze au Tonkin et dans le Nord-Annam, BÉFEO XXIX, 1929.
- 97 松本信広「古代日本と南方との関係」国文学解釈と鑑賞一九卷九号 一五八―一六二頁
- 98 松岡静雄前引書 三九四―三九五頁
- 99 松本信広「日本の神話」至文堂 一九〇年及び「古代伝承に表われた車と船」文化人類学 角川書店
- 100 松本前引書(後)
- 101 大林太郎「葬制の起源」角川新書 一七五頁
- 102 筆者が国分直一教授と採訪 国分直一「日本および南島における葬制上の諸問題」民族学研究二七―二
- 103 日出町地方では「シヨロサマ」はツツメにのって帰ってくるという。日出町豊岡安部タカオ 89 才談
- 104 柳田国雄監「民俗学辞典」四三二―四三三頁
- 105 柳田国雄前引書 四三二頁
- 106 小林行雄「古墳のはなし」岩波書店
- 107 石田英一郎「桃太郎の母」天馬の道 講談社一九六六年 二五四―二五五頁引用
- 「楚辞」九歌東君及び「淮南子」天文訓 (遠見郡日出町教育委員会 日出町三、〇四一)